

『三国遺事』 訳注（一）

新羅史研究会

凡 例

- 一、本稿は一然撰『三国遺事』の原文、読み下し文、口語訳および注であり、底本には学東叢書本『三国遺事』（学習院東洋文化研究所刊、一九六四年）を用いた。
- 一、原文は旧漢字を用い、句読点を施した。また底本の現状を保つ意味から俗字等の異体字はそのまま使用することを原則とし、底本の文字を改めた場合は、その文字に数字（①②③…）を付して原文のあとに異同を記した。校訂に際しては韓国古典叢書本（民族文化推進会刊、一九七三年、ソウル）および晩松文庫本（高麗大学校中央図書館刊、一九八三年、ソウル）と校合し、その他の活字本を参照した。なお内容によって文を適当な段落に区切り、割注は（ ）で示した。
- 一、読み下し文は旧漢字・新かなづかいを用いた。
- 一、口語訳は新漢字・新かなづかいを用い、訳出にあたって補った文は「〔 〕」で示した。
- 一、注は口語訳の文中に数字（①②③…）を付し、文末に一括した。な

お参考文献等の提示は必要最小限にとどめた。

一、『三国遺事』は王曆と紀異篇以下の本文とからなるが、さしあたり第一巻紀異篇から訳出を開始する。

一、本稿は新羅史研究会（代表武田幸男）における共同研究の成果である。研究会参加者が分担して訳注の原案を提示し、全体の討議を経て原稿を作成した。これまでの研究会参加者は次の通りである。

大井剛、木村誠、小見山春生、鈴木英夫、武田幸男、田中俊明、中尾敏朗、布山和男、浜田耕策、林泉、原田一良、深津行徳、松原孝俊、李成市、李鎔賢、裴元柱、辛鍾遠

紀異卷第一・叙

「原文」

紀異卷第一

叙曰。大抵古之聖人、方其禮樂興邦、仁義設教、則怪力亂神、在取不語。然而帝王之將興也、膺符命、受圖籙、必有以異於人者、然後能乘大

變、握大器、成大業也。故河出圃、洛出書、而聖人作、以至虹繞神母而誕羲、龍感女登而生炎、皇娥遊窮桑之野、有神童自稱白帝子、交通而生小昊、簡狄吞卵而生契、姜嫄履跡而生弃、胎孕十四月而生堯、龍交大澤而生沛公。自此而降、豈可殫記。然則三國之始祖、皆發乎神異、何足怪哉。此紀異之旨以慚諸篇也。意在斯焉。

①【登】底本は登。登とも読めるが登である。

②【生】底本は注。生の誤り。

③【狄】底本は狄。狄の誤り。

④【卵】底本は卵（卵）とも読めるが卵である。

⑤【跡】底本は跡。

⑥【殫】古典叢書本・晚松文庫本ともに偏の字画が判然としない。底本に殫とあるのは加筆。

「読み下し文」

紀異巻第一

叙に曰う。大抵、古の聖人は、まさに其の禮樂もて邦を興し、仁義もて教を設けんとするや、則ち怪力亂神は語らざる旨に在り。然れども帝王のまさに興らんとするや、符命を膺け、圖籙を受け、必ずもって人に異なる者有りて、然る後、能く大變に乗じ、大器を握り、大業を成すなり。故に、河、圃を出し、洛、書を出して聖人作り、もって虹、神母を繞りて羲を誕み、龍、女登に感じて炎を生み、皇娥、窮桑の野に遊ぶや神童の自ら白帝子と稱する有りて、交わり通じて小昊を生み、簡狄、卵を呑みて契を生み、姜嫄、跡を履みて弃を生み、胎孕すること十四月に

して堯を生み、龍、大澤に交わりて沛公を生むに至る。これより降は、あに殫く記すべけんや。然らば則ち、三國の始祖、皆神異より發すること何ぞ怪しむに足らんや。これ紀異の諸篇に慚する旨に在り。意、斯に在り。

「口語訳」

〔一〕三國遺事巻第一・紀異第一

はじめに述べておく。およそ昔の聖人が礼樂によって国をおこし、仁義によって教えを定めようとする時には、怪力亂神などについては語らないものである。しかし帝王がまさに現れようとする時には、符命や圖籙を受けるなど必ず人と異なるところがあり、そのあとで大きな変化に乗じて大器を握り、大業を成就することができるのである。だから黄河が図を出し、洛水が書を出すことで、聖人が世に現れるのであり、そうして虹が神母をとりまいて伏羲が生まれ、龍が女登に感じて炎帝が生まれ、皇娥が窮桑の野に遊んでいると、みずから白帝の子と名乗る神童が現れて、これと通じて少昊を生み、簡狄が卵を呑んで契を生み、姜嫄が「巨人の」足跡を踏んで弃を生み、「慶都は」みごもってから十四ヶ月目に堯を生み、龍が大澤で「劉媪と」交わりて沛公を生むなど、不思議なことがいろいろおこるに至ったのである。それからのちの不思議な出来事は、とうてい書き尽くすことができないほどである。だから三國の始祖がみな神異な出来事によって生まれたというのも、決して怪しいことではない。ここに紀異を諸篇に先立ってはじめるのはそのためである。これが私の考えである。

【注】

(1) 【三国遺事卷第一・紀異第一】原文は「紀異卷第一」とするだけであるが、第三卷以下にならって「三国遺事卷第一・紀異第一」とすべきである。ちなみに『三国遺事』は五巻からなっており、その篇目は王曆・紀異・興法・塔像・義解・神咒・感通・避隱・孝善の九篇である。現行本の巻次・篇目構成は次の通りであるが、冒頭部分に混乱が見られ、第三卷以下とは様相が異なる。この混乱は、本来独立した一書であった王曆をあとから付け加えたために生じたと考えられる（末松保和「三国遺事解説」、学東叢書本『三国遺事』所収）。したがって本来の巻次・篇目構成を下段のように復元することが可能である。

(現行)

三国遺事王曆第一
紀異卷第一

三国遺事卷第二

三国遺事卷第三

興法第三
塔像〔第四〕

三国遺事卷第四
義解第五

三国遺事卷第五

(復元)

三国遺事王曆
三国遺事卷第一

三国遺事卷第二
紀異第二

三国遺事卷第三
興法第三

塔像第四
三国遺事卷第四

義解第五
三国遺事卷第五

三国遺事卷第五

神咒第六

感通第七

避隱第八

孝善第九

神咒第六

感通第七

避隱第八

孝善第九

(2)

【はじめに述べておく】現行の『三国遺事』には序文や目録がない。「叙」で始まる本条も、形式的にはあくまでも紀異篇の序文であり、『三国遺事』全体のそれではない。ただしその述べるところは紀異篇の位置付けに関するものであり、全体にかかわる内容となっている。注(1)でみたように「王曆」が本来独立した一書であったならば、この「叙」はもともと『三国遺事』全体の序文として記されたものであったかもしれない。本条では、歴史篇ともいべき紀異篇を、仏教関係記事が主体の興法篇以下に先立って始める理由を述べており、『三国遺事』編者による篇目構成の精神をうかがい知ることができる点で貴重である。

(3)

【怪力乱神】怪は怪異（不思議）、力はただけだけしい力、乱は道理にもとること、神は鬼神をいう。『論語』述而篇に「子は怪力乱神を語らず」とあるのによったものであろう。

(4)

【符命や図籙】符命は天命。天が君主となるべき人に授けるしるしのこと。図籙は未来の吉凶禍福を予言した書物。

(5)

【大器】天子の位、国家をいう。

(6)

【黄河が図を出し、洛水が書を出す】『易经』繫辞上伝に「河、図を出し、洛、書を出して、聖人これに則る」とあるのによる。黄河から出た龍馬の背にあった図によって伏羲が八卦を画し、洛

水から出た神亀の背にあった文によって禹が洪範九疇を作ったと伝えられる。

- (7) 【伏羲】中国古代の伝説上の帝王の名。太昊のこと。三皇の一つ。犠牲を養って庖厨に充てたので庖犧ともいう。はじめて民に漁獵・牧畜を教え、八卦を画して文字を作った。

- (8) 【炎帝】同じく三皇の一つで神農氏のこと。耒耜を作って農業をおこしたので神農氏といわれ、火徳をもって王となったので炎帝とよばれる。その母女登が龍に感じて炎帝を生んだ話は唐・司馬貞撰『補史記』三皇本紀にみえる。

- (9) 【窮桑】かつて少昊が居したとされる所。山東省曲阜県の北に比定される。

- (10) 【白帝】五天帝の一つ。五行では白、季節では秋にあたり、西方をつかさどる。

- (11) 【少昊】原文は小昊とあるが少昊のこと。中国古代の伝説上の帝王で少皞とも書く。黄帝の子。太昊（伏羲）の法を修めたので少昊という。また金徳をもって王となったので金天氏ともいい、後世、秋をつかさどる神となす。その母皇娥が少昊を生んだことは前秦・王嘉撰『拾遺記』少昊条にみえる。

- (12) 【契】商（殷）の始祖。その母簡狄が卵を呑んで契を生んだ話は『史記』殷本紀にみえる。

- (13) 【弃】周の始祖后稷のこと。その母姜嫄（姜原）が巨人の足跡を踏んで弃を生んだ話は『史記』卷四・周本紀にみえる。

- (14) 【堯】中国古代の伝説上の聖天子。はじめ陶に、のち唐に封じら

れたので陶唐氏と呼ばれ、唐堯ともいう。その母慶都がみごもること十四ヶ月にして堯を生んだ話は『史記正義』所引『帝王紀』

（晋・皇甫謐撰『帝王世紀』）にみえる。

- (15) 【沛公】漢の高祖劉邦のこと。沛公の名は沛の地で挙兵したことによる。その出生譚は『史記』卷八・高祖本紀にみえる。

（原案・文責 木村誠）

古朝鮮（王儉朝鮮）

〔原文〕

古朝鮮（王儉朝鮮）

魏書云。乃往二千載、有歌壇君王儉、立都阿斯達（經云無萊山。亦云白岳。在白州地。或在開城東。今白岳宮是）、開國號朝鮮。與高同時。古記云。昔有桓因（謂帝釋也）庶子桓雄、數意天下、貪求人世。父知子意、下視三危太伯、可以弘益人間。乃授天符印三箇、遣往理之。雄率徒三千、降於太伯山頂（即太伯今妙香山）神壇樹下。謂之神市。是謂桓雄天王也。將風伯・雨師・雲師、而主穀、主命、主病、主刑、主善惡。凡人間三百六十餘事、在世理化。時有一熊一虎同穴而居。常祈于神雄、願化爲人。時神遺靈艾一炷、蒜二十枚、曰。爾輩食之。不見日光百日、便得人形。熊虎得而食之、忌三七日、熊得女身、虎不能忌而不得人身。熊女者無與爲婚。故每於壇樹下呪願有孕。雄乃假化而婚之、孕生子。號曰壇君王儉。以唐高即位五十年庚寅（唐堯即位元年戊辰、則五十年丁巳、非庚寅也。疑其未實）、都平壤城（今西京）、始稱朝鮮。又移都於白岳山阿斯達。又名弓（一作方）忽山、又今弥達。御國一千五百年、周虎王

即位己卯、封箕子於朝鮮。壇君乃移於藏唐京、後還隱於阿斯達、爲山神。壽一千九百八歲。

唐裴矩傳云。高麗本孤竹國(今海州)。周以封箕子為朝鮮、漢分置三郡。謂玄菟・樂浪・帶方(北帶方)。通典亦同此說(漢書則真・臨・樂・玄四郡。今云三郡、名又不同。何耶)。

①【儉】底本は儉。侯とも読めるが、儉の略字。以下同じ。

②【因】底本に因とあるのは加筆。古典叢書本と晩松文庫本はともに因であるが、因が正しい。

③【釋】底本は叙。

④【太】底本に太とあるのは加筆。古典叢書本・晩松文庫本ともに大である。

「読み下し文」

古朝鮮(王儉朝鮮)

魏書に云う、「乃往二千載に、壇君王儉、都を阿斯達(経に無萊山と云う。亦白岳とも云う。白州の地に在り。或は開城の東に在りと云う。今の白岳宮が是れなり)に立て、國を開きて朝鮮と號すること有り。高と時を同じうす」と。

古記に云う、「昔、桓因(帝釋を謂うなり)の庶子桓雄、數天下を意い、人の世を貪り求むること有り。父、子の意を知り、三危太伯を下視するに、もつて人間を弘益すべし。乃ち天符印三箇を授け、遣わし往きてこれを理めしむ。雄、徒三千を率い、太伯山頂(即ち太伯は今の妙香山なり)の神壇樹の下に降る。これを神市と謂う。是れ謂わゆる桓

雄天王なり。風伯・雨師・雲師を將いて穀を主り、命を主り、病を主り、

刑を主り、善惡を主る。凡そ人間の三百六十餘事を主り、世に在りて理め化する。時に一熊一虎、穴を同じうして居すること有り。常に神雄に祈り、化して人と爲らんことを願う。時に神、靈艾一炷、蒜二十枚を遣りて曰く、「爾輩これを食え。日光を見ざること百日にして便わち人形を得ん」と。熊・虎、得てこれを食い、忌むこと三七日、熊、女身を得、虎、忌むこと能わずして人身を得ず。熊女は與に婚を爲すこと無し。故に毎に壇樹の下において孕む有らんことを呪願す。雄、乃ち假りに化してこれと婚し、孕みて子を生む。號して壇君王儉と曰う。唐高の即位五十年庚寅(唐堯の即位元年は戊辰なれば、則ち五十年は丁巳にして、庚寅に非ざるなり。疑うらくは其の未だ實ならざることをもつて、平壤城(今の西京)に都し、始めて朝鮮と稱す。又、都を白岳山の阿斯達に移す。又は弓(一に方に作る)忽山又は今弥達と名づく。國を御すること一千五百年、周の虎王、即位の己卯に箕子を朝鮮に封ず。壇君、乃ち藏唐京に移り、後、還りて阿斯達に隠れ、山神と爲る。壽一千九百八歳なり」と。

唐の裴矩傳に云う、「高麗、本、孤竹國(今の海州)なり。周、もつて箕子を封じて朝鮮と爲し、漢、分ちて三郡を置く」と。謂ゆる玄菟・樂浪・帶方(北帶方)なり。通典も亦、此の説と同じなり(漢書は則ち真・臨・樂・玄の四郡なり。今、三郡と云い、名も又同じからず。何ぞや)。

「口語訳」

古朝鮮（王儉朝鮮）⁽¹⁾

『魏書』によると、「二千年前に檀君王儉が都を阿斯達（⁽²⁾経には無葉山という。また白岳ともいう。白州の地方にある。あるいは開城の東にあるともいう。いまの白岳宮がこれである）に定め、国を開いて朝鮮と号した。それは高と同じ時代のことであった」という。

『古記』によると、「むかし桓因（帝釈のことである）の庶子の桓雄がしばしば天下を治めることを願い、しきりに人の世に行くことを求めた。父の桓因は、わが子の思いを知り、三危太伯の山を見下ろすと、人々に益を弘めることができる場所であった。そこで桓雄に天符印三箇を与え、下界に遣わして人間の世界を治めさせることにした。桓雄は部下三千人を率い、太伯の山頂（即ち太伯は今の妙香山のことである）の神檀樹のもとに降りた。そこは神市と呼ばれた。またこれがいわゆる桓雄天王である。「桓雄は」風と雨と雲の神を従え、穀物、生命、病氣、刑罰、善悪をつかさどった。こうしておよそ人の世の三百六十余におよぶあらゆる事をつかさどり、世にあって人々を治め教化した。時に、一頭の熊と一頭の虎が同じ穴に住んでいた。熊と虎はいつも桓雄を神として祈っては人間になることを願っていた。ある時、桓雄は靈妙なよもぎにぎりとにんにく二十個を与え、「おまえたちよ、これを食べるがよい。そして陽の光を見ないで百日を過ごせば、人間になることができるであろう」といった。熊と虎はこれをもらって食べ、物忌みすること二一日目に熊は女身に変わることができたが、虎は忌むことができず、人間になれなかった。「こうして人の姿になったものの」熊女には結婚相手がいなかった。そのためいつも檀樹のもとでみごもることを祈っていた。

そこで桓雄は仮に人間の姿となって熊女と結婚し、「熊女は」みごもつて子を生んだ。その子の名を檀君王儉と叫んだ。「檀君は」唐高の即位五十年庚寅の年（唐堯の即位元年は戊辰であるから、即位五十年は丁巳であつて庚寅ではない。おそらくまちがいであろう）に、平壤城（今の西京⁽¹²⁾）に都を定め、はじめて国の名を朝鮮とした。また都を白岳山の阿斯達に移した。そこはまた、弓（方と書くこともある）忽山または今弥達とも叫んだ。「檀君は」一千五百年にわたつて国を治めたが、周の虎王が、その即位の己卯の年に箕子を朝鮮に封じた。そこで檀君は藏⁽¹⁶⁾唐京に移り、のちに阿斯達にもどつて隠れ住み、山神となった。寿命は一千九百八歳であつた」という。

唐の裴矩伝によると、「高麗はもとの孤竹国（今の海州）である。周がそこに箕子を封じて朝鮮とし、漢がそれを分けて三郡を置いた」という。いわゆる玄菟・楽浪・带方（北带方）である。『通典』もまた、この説と同じである（『漢書』では真番・臨屯・楽浪・玄菟の四郡である。いまここでは三郡といい、名称も同じではない。なぜであらうか）。

〔註〕

(1) 【古朝鮮（王儉朝鮮）】古朝鮮といえ、現在では檀君朝鮮（王儉朝鮮）・箕子朝鮮・衛氏朝鮮の三つの朝鮮をさすのが一般的である。これらを古朝鮮と総称するのは、のちの朝鮮王朝（李氏朝鮮）と区別するためである。しかし、一然が『三国遺事』を編纂した時には朝鮮王朝はまだ成立していないから、ここにいう古朝鮮は当然のことながら、それとは異なる意味で使用されたもので

ある。割注に「王儉朝鮮」とあるようにそれはもっぱら檀君朝鮮だけをさしている。檀君王儉の朝鮮が、それまで知られていた朝鮮よりも古いことを強調したのであろう。朝鮮の歴史は檀君王儉から始まるとする一然の歴史観が、ここにかがえる。なお『三国遺事』は檀君伝説を載せる現存最古の文献であるが、檀君関係の記事は、本条のほかに王暦の高麗・第一東明王条の割注と紀異篇・高句麗条の割注にもみえる。また『三国遺事』以外の檀君史料としては、李承休（一二二四～一三〇〇年）撰『帝王韻記』巻下がある。『三国遺事』とはほぼ同時期の著作であり、『本紀』・『檀君本紀』を引用して檀君伝説を伝える。内容に若干の異同があるが、『三国遺事』とともに檀君関係の基本史料として重視される。さらに朝鮮王朝時代になると、檀君伝説を記録する文献がいくつかわれるようになる。その主なものは『世宗実録地理志』巻一五四・平壤府条と権擘『応制詩』注であり、前者は『檀君古記』を、後者は『古記』をそれぞれ引用する。ただし、『檀君古記』は基本的に『帝王韻記』の記事に依拠しており、『応制詩』注の『古記』も多くを『三国遺事』によっている。

(2) 【『魏書』】 現行の魏取撰『魏書』(一一三〇巻、中国北魏王朝の興亡史)には檀君王儉に関する記事はない。また陳壽の『三国志』魏書にも見当たらない。そのため『魏書』からの引用そのものを疑う向きもある(今西龍「檀君考」『朝鮮古史の研究』国書刊行会、一九七〇年)。しかし『魏書』と呼ぶべき書物はほかにも数種類編纂されており、しかもそのほとんどはすでに失われてしまっ

たか、あるいは佚文をいくつか残すだけであるために、檀君記事の存否を確認することができない。したがって『魏書』からの引用を頭から否定することにも問題が残る。要するに『三国遺事』に引用された『魏書』の性格は、いまのところ不明といわざるを得ないのである。なおこうした動向とは別に、『魏書』を「魏満朝鮮の歴史や説話を記した書」とみる見解があつて注目される(丁仲煥「三国遺事紀異篇古朝鮮条に引用された魏書について」『大丘史学』一二・一三合輯、一九七七年、テグ)。それまで『魏書』を中国の史書とみて疑わなかった点に一石を投じたものであるが、肝心の『魏書』の実体が不明である。今後の検討課題といえよう。『魏書』をめぐるこれまでの研究に関しては、田中俊明「檀君神話の歴史性をめぐって」(『韓国文化』一九八二年六月号)参照。

(3) 【檀君王儉】 檀君および神檀樹の檀字は、底本では壇に作るが、檀が正しい。『帝王韻記』では檀字が用いられており、その後の文献もすべて壇に作る。檀君王儉という名称の由来については、檀君は尊称で王儉がその本名、前者は妙香山の靈木栴檀に因み、後者は平壤の守護神王儉仙人に由来するといふ今西龍説(前掲論文)や、檀君は巫(ムーダン)を意味するタングルのことであり、モンゴル語の天・巫に通じ、天君をあらわすとする崔南善説(「檀君及其研究」『六堂崔南善全集』二、一九七三年、ソウル)などが代表的なものである。今西説では、檀君王儉はそれまで平壤の地方神であつた仙人王儉が高麗仁宗～高宗代に国家神に転化

したというから、その史実性に関しては否定的である。これに対して崔南善説は、檀君伝説は何らかの史的事実を反映したものであり歴史的考察に耐えうると理解する。こうした見地は大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国の研究者に受け継がれ、いまでは檀君伝説の史実性の追究がさまざまに試みられている。

(4) 【阿斯達】阿斯達の原義については、童地(阿斯は童^{トウ}、達は地名語尾)と訳して天童降下に因む聖地とする説(三品彰英『増補日鮮神話伝説の研究』平凡社、一九七二年)や、朝山・朝光の地・陽岳(阿斯は朝・朝光、達は山岳・谷間)と理解して本文中の白岳に通じるとする説(李丙燾「檀君説話の解釈および阿斯達問題」『韓国古代史研究』学生社、一九八〇年)などがある。阿斯達の名称は、すでに『高麗史』卷二三・高宗二一(一二三四)年条に「左蘇・阿思達」とみえている。それによれば、ある僧が阿思達(阿斯達)に宮闕を営めば、国運が八百年延びると予言したというから、そのころすでに阿斯達は讖緯家によって吉祥の地と観念されていたことがわかる。阿斯達が檀君の王都とされたのもこうした動向と無関係ではないであろう。阿斯達の現地比定については、本条は後文に「白岳山の阿斯達」とあるように阿斯達Ⅱ白岳山とし、それを高麗時代の白岳宮にあてることが(注(5)参照)、それとは別に『高麗史』卷五八・地理志・儒州条、『応制詩』注、『世宗実録地理志』卷一五二・黄海道文化県条などは九月山(現在の黄海南道信川郡)とする。それによれば、九月山には桓因・桓雄・檀君をまつる三聖祠があり、檀君が移り住んだと

される蔵唐京も文化県内の疋疋坪に比定される(注(16)参照)。さらに九月山東麓の安岳に「阿斯津省草串、阿斯津桃串」の地名がみえるように(『高麗史』卷五八・地理志・安岳郡条)、九月山一帯は檀君ゆかりの地とみなされていた。

(5) 【経】には「白岳宮がこれである」この割注では阿斯達を無葉山または白岳とし、白岳宮をそれにあてて。その典拠となる経はおそらく讖緯の書のたぐいと思われるが、実体は不明。また無葉山も不明。白岳については、『高麗史』卷三九・恭愍王九(一三二六〇)年条が「白岳に幸し、遷都の地を相あひまい視る。白岳は臨津県の北五里に在る」という。同年条は宮闕の造営と白岳新宮への王の移御も伝える。白岳宮とはこのことであろう。臨津県は現在の京畿道長湍郡であり、まさしく開城の東にあたる。白州は現在の黄海南道延白郡白川である。なお、白岳宮の造営年代からみてこの割注は一然の原注ではありえない、とする向きもあるが(高橋亨「三国遺事の註及檀君伝説の発展」『朝鮮学報』七、一九五五年)、白岳における宮闕造営は恭愍王代以外に高宗代にもみえるから(『高麗史』卷二二・高宗四「一二一七」年条)、後人の注と断定することはむずかしい。

(6) 【高】堯のこと(「叙」注(14)参照)。高は高麗定宗の諱の堯を避けたもの。

(7) 【古記】『三国遺事』には本条以外にも『古記』からの引用がしばしばみられ、それが特定の書名ではないことを示している。『古記』とは「古い記録」というほどの意味であり、その実体は

各条の内容に即して理解されなければならない。本条の場合、紀異篇高句麗条に引用されている『壇(檀)君記』と同一もしくは同系統の書と思われる。

(8) 【桓因(帝釈)】古代インドの神が仏教に取り入れられたもの。

サンスクリットで Sakra Devanam Indra といい、釈迦提桓因陀羅と表記される。帝釈天ともいう。仏法の守護神で須弥山の頂きにある忉利天に住むという。『三国遺事』が編纂された高麗時代には帝釈信仰が盛んであり、帝釈院・外帝釈院への王の行幸が『高麗史』に散見される。また宮殿内でも帝釈道場がしばしば設けられて息災が祈られた。

(9) 【三危太伯】山名もしくは星名。三危山・太伯山は中国・朝鮮各地にみられる。また危は「高い」を意味するから三危とは「三つの峯」のことで、これを「三山のひとつの太伯」と解することも可能。星にみた場合、参(三)星は西方にあり、危星は二十八宿のひとつ、太白星は金星である。どちらにも解釈できるが、桓雄が太伯山頂に降ったことを考えると、山名がより妥当であろう。

(10) 【天符印】天符は天がくだす祥瑞。印はしるし。天符印とは人間世界を治めるための天の命令を意味するのであろう。

(11) 【太伯は今の妙香山】妙香山は、現在の平安北道熙川南方約二〇^{*}にあつて平安北道と南道の境をなす山。金富軾撰『高麗国延州妙香山普賢寺記』(仁宗一九、一一四一年)によると、探密・宏廓の二僧が高麗靖宗八(一〇四二)年に延州の山に普賢寺を建て、その山を妙香と名づけたという(『朝鮮金石総覧』上)。そこに

は太伯の名称がみられないから、金富軾が寺記を記した一二世紀中頃には、まだ妙香山を太伯山と称してはいなかったようである(今西龍前掲論文)。なおこれとは別に新羅時代から太伯山と称されてきたのが、江原道と慶尚北道の境にある現在の太白山である。新羅時代には中祀・五岳中の北岳にあてられ、朝鮮王朝初期にも太伯天王堂が祭られていた(『世宗実録地理志』卷一五三・三陟都護府条)。

(12) 【西京】現在のピョンヤン。高句麗時代には王都として栄えたが、高句麗滅亡後は荒廃した。高麗太祖は即位と同時に大都督府として復興に着手し、のち西京とした。

(13) 【弓(方と書くこともある)忽山または今弥達】弓を方とも書くというのは、弓(弓)の字形を方に誤ったものであろう。弓と今弥、忽と達が音通する。

(14) 【虎王】武王のこと。高麗惠宗の諱の武を避けたもの。

(15) 【箕子】殷末の人。箕子朝鮮の始祖とされる。周の武王が箕子を朝鮮に封じた話は、『尚書大伝』殷伝鴻範や『史記』卷三八・宋微子世家に伝えられる。それによると、箕子をはじめ殷の末王の紂を諫めたがいられず、いつわり狂い奴となった。のち殷を滅ぼした周の武王が箕子を朝鮮に封じ、鴻範(洪範)九等を尋ねたという。また殷の衰えをまのあたりにした箕子が朝鮮に逃れ、その民に礼儀・田蚕・織作を教えたともいわれる(『漢書』卷二八下・地理志・燕地条)。しかし『尚書』洪範では、箕子の洪範演述は述べられても朝鮮のことにはふれられない。箕子と朝鮮のか

かわりはおそらく本来の箕子伝説にはなかったであろう。箕子の朝鮮開国をそのまま史実とみなすことはできない。ただし中国の文献によれば、前四世紀頃の朝鮮半島には朝鮮を称する独自の勢力が存在するとともに、秦・漢交代の混乱期などには燕・斉・趙の人々が多く朝鮮に流入したという。箕子の朝鮮開国伝説はこうした動向を背景として成立し、前漢代の中国に流布していったものと思われる。朝鮮においても箕子朝鮮伝説は次第に広まり、高麗時代には平壤に箕子の墓を定め箕子祠がまつられるなど、朝鮮教化の始まりとして尊崇された。

(16) 【藏唐京】『世宗実録地理志』卷一五二・黄海道文化県条に「庄坪、県の東に在り（朝鮮檀君の都する所と世伝す。即ち唐莊京の訛なり）とある。唐莊京は藏唐京のことであろう。文化県は現在の黄海南道信川郡である。

(17) 【唐の裴矩伝】裴矩は河東・聞喜県の人。字は弘大、諡は敬で北齊・隋・唐の三王朝に仕える。裴矩伝は『隋書』はじめ『北史』・『旧唐書』・『新唐書』にあり、本文に引用された内容も各伝にみえるが、文章としては『新唐書』卷一〇〇・裴矩伝の「高麗、本、孤竹国なり。周、もつて箕子を封じ、漢、三郡に分かつも、今乃ち臣たらず。先帝、これを疾にくみ、討たんと欲して久し」の一節がもっとも近似している。おそらく『新唐書』からの引用であろう。ちなみにこれは、裴矩が隋の煬帝に従って突厥の啓民可汗の帳に行つたときに上奏した対高句麗策の一部であり、文中の高麗は高句麗のことである。

(18) 【孤竹国（今の海州）】孤竹は商（殷）の時代の国名。孤竹とも書く。現在の中国河北省灤河下流域に比定される。孤竹君の二子伯夷と叔齊が周の武王を諫めたがいられず、のち、周が天下を統一するにおよんで、首陽山に隠れて餓死したという（『史記』卷六一・伯夷列伝）。海州は現在の黄海南道海州の地。もと高句麗の内米忽郡、新羅の漢州瀑池郡。海州の名は高麗太祖代よりはじまる。「今の海州」が一然の原注であるかどうかは判然としな
い。孤竹国＝海州説は、『三国遺事』のほかに『高麗史』卷五八・西海道安西大都護府海州条と『世宗実録地理志』卷一五二・黄海道海州牧条にもみえる。ともに海州の別号として孤竹の名を載せ、州内に首陽山のあることを伝える。特に後者では、首陽山の注に「東南の海中三十里許に二小島有り。俗に号して兄弟島と為す。（中略）諺に、伯夷・叔齊ここに死すと称す。故に州を号して孤竹国と為す」とある。さらに、『新增東国輿地勝覽』卷四三・海州牧条には、「高麗、本、孤竹国なり。李膺、今の海州と云う」とある。孤竹国＝海州説がこの李膺から始まるとも断定できないが、彼は高麗末＝朝鮮王朝初期の人であるから、おそくともその頃までには孤竹国＝海州説が成立・流布していたとみることがができる。

(19) 【『通典』】唐の杜佑（七三五～八一二）の撰。上古から唐代までの諸制度の沿革を記したもの。なお現行の『通典』には、漢が女菟・桑浪・帯方の三郡を置いたとする文はみあたらない。

（原案・文責 木村誠）